

104

61

真理教
完

013682-000-8

104-61

真理教

石西 尚一/編

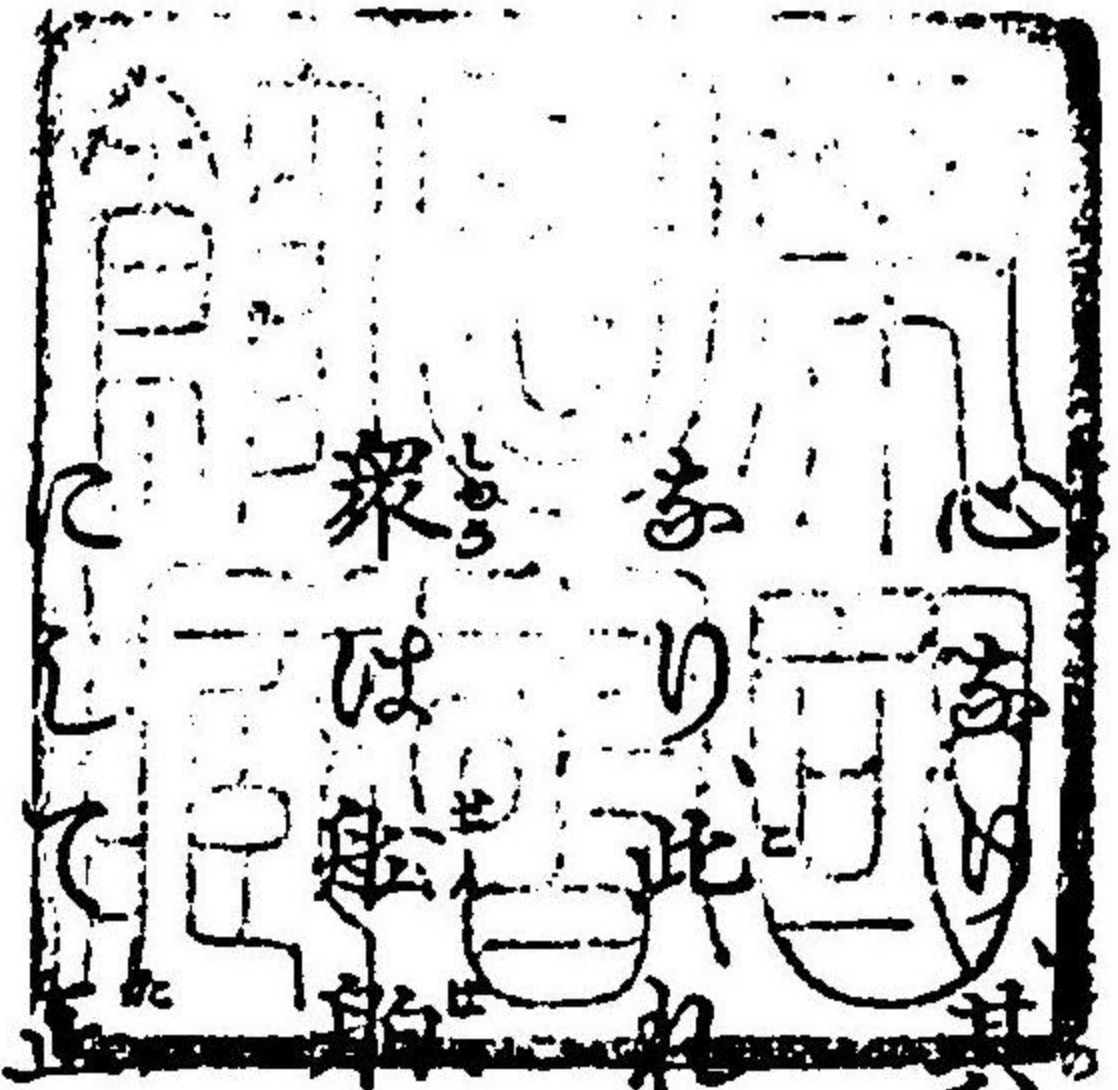
M30

ABA-0153



真理教

緒言



夫れ國の本は人あり人の人たる天職を尽さしむる本は

心とて此れに向はしむるものは宗教的教化

と事物に譬ふれば國家は或る一の港灣あり人

あり宗教は羅針あり故に此れが羅針たる宗教

あり宗は羅針あり故に此れが羅針たる宗教

し人衆にして正に向はざらんか歸着點ある天下國家は

固より正道のものにあらず此に於て乎禍乱因て起り災

害随つて生ず故に國家として泰山の安きに置かんと欲



すれば、須らく真正無垢の宗教を以て人心を支配し、而して後人心の磅礴鬱積せる正氣を以て宇宙間に於ける天地自然の正氣を吸收せん。鬼神も以て招くべく、佛陀も以て来すべし、斯くの如くにして未だ安寧を保たざるの國家あるを聞かず。

明治維新以降我國の文明は頓みに進歩し来り、其初日本てふ固有名詞は地球上の奈邊に存在せるか、殆んど世に知られず、或者は支那の一屬邦たるかと迄誤認せしにも係はらず、疑ては富岳と爲り發しては万朶の櫻雲と爲るの精魂靈魄は如何ぞ能く久しきに隱伏すべき、殊に二十

七八年の戦役以来一躍して世界の檜木舞臺の上に登り他の碧眼兒として後へに瞠若せしむる大々の快事を演出するに至れり、是に於て因循姑息蝸牛的生活を以て自ら甘んぜし邦人も頓みに自家が價値の存する處を自覺し、誇大の口調を以て、或は世界の日本と呼び、或は膨脹的、日本と唱へ、殊に年少血氣の士は東洋の覇權は何ん、その勇進鼓舞以て世界の盟主と爲らざるべからずと、即ち大聲疾呼して曰く、日本國民の思想は雄壯あるべし、因循あるべからず、進取的あるべし、保守的あるべからず、快活健全あるべし、病的たるべからず、大欲は事業上に必要

あり然れども小成に安んずるは鳩毒ありと、其の所説也
善し其意氣の軒昂や固より杜あり、然れどもこは是れ畢
竟するに皮想の放言高論にして快を一時に取るもの
言ある耳乞ふ退いて仔細に我邦の内情を觀察せよ、仁義
道徳は地を掃ふて尽き、或は子にして親を賊あふあり、妻
にして其夫を害するあり、實學は廢れて空論の世とあり、
勤勉質素の美風は一變して奢侈情弱の弊風に傾き、舉世
滔々只利にのみ趨て義の何物たる事を微塵辨へず、陰險
狡捨誦詐論偽笑裡劍を含み、親言毒を包むもの真に今日
の状態ありとす、此れ果して如何ある原因の存する有つ

て然るに、惟ふに世の文明の進むと同時に貧富の階級は
反比例を以て多々倍々懸隔せる事は、歐米各國の歴史に
徴するも、誣由べからざるの事實あり、何とあれば茲に富
者は大資本を仰して新たる一の事業を企畫するありと
假定せよ、従来人力を以て爲せしものも所謂文明の利器
ある機械に壓倒せられ、例令は嚮日百人を要せし工業も
僅かに十人を使用して事足れるに到らん、果して然らば
其餘の人衆は憐れ忍ち職業を失ひて路頭に彷徨し、飢渴
の餘義あきに陷ると雖も、繰て一方の資本家あるものを
觀れば、夥多の冗費を節減せしが爲め、多々倍々巨利を獨

占するに至る故を以て富者は益々富み貧者は愈貧其の
隔絶豈に徒に参と商とに於けるが如きの比あらんや、と
れば自然的事實上富豪者は寥々乎として晨星も啻あら
ざる少数に引換は貧困者は累々として濱の真砂の數限
りあく存在するあるべし、見よ歐米の文明國と稱道せら
るる各國に於ける皮想上の文明は如何に燦爛灼爚とし
て人目を眩せしむるよ、然れども一度び其の裏面に立入
らば黒闇々の下等貧窟を以て充されありと、故を以て必
要は貧民税と云へる一種の救助税の餘義あきあり、其の
他種々ある名稱の下に慈善的事業の勃興するに徴する

も貧民の多數あるを証すべき事どもあり、此れに依りて
之を觀れば該國の如きは畢竟富者が貧者を製造し得る
と切言するも敢て過當にはあらざるが如し、然り而して
此の多數の貧民中より謂ゆる貧の盜賊を出すは免るべ
からざるの數にして依て以て倫理道德を壊亂し只管私
利を營む事に汲々たるに至るもの職として此れに因ら
ずんばあらず、嗚呼衣食足つて禮節を知るもの畢竟此れ
の謂ひある哉
米人某嘗て謂へり米國の進歩は日本進歩の數十年の昔
に在りき、而して今日其の文明と云へるもの、真相を窺

ふに富者と稱するものは真に僅少の數にして、其大部分
と占むるものは實に見る影もあき下底究民なり、されば
此の富者あるものは政事も經濟も自由も信仰もあらゆ
る社會の權利を一切に掌握し一國の政府もあはや左右し
得べき有様とはなれり、是れ畢竟完全なる社會制と敷か
ざりし結果なり、惟に日本は増々文明の域に進むと同時
に希はくは米國の轍を踏まず須らく茲に多數人民の文
明進歩を謀り、より多く中等以上の人民を造成し以て各
國の模本と爲らざるべからずと、此れ真に苦言痛語其の
内幕を吐露して餘蘊なきものあり、然らば即ち我國の自

今取るべき方針あるものは貧富の階級を少くとも打破
し、此れよりして一様に文明の餘澤を蒙らしめ依て以て
和衷協同一國の進歩を計り世界の日本なる名聲に背か
ざるの實を擧げん事吾人の寤寐だも念頭と脱却し能は
ざる處のものなり
然らば即ち此れが方法は如何、須らく此般多數の貧且つ
愚なる人衆をして感應融化せしむるの外なし、夫れ人一
の究巷に至らんとするにも必ず先づ其道を尋ねて進
む、況んや人間生より死に至る五十年の行程豈に道の求
むべきものなくして可ならんや、徒らに醉生夢死以て此

生と了るは畢竟下等動物の事、吾人々類の決て爲すと屑
とせざる所あり

此れに依り吾人は信ず、多數人衆と感應融化せしむるも
の宗教より善きはあし、宗教にあらざれば以て健全ある
社會の發達は成し能はざるありと、庠序教育固より必要
あり、然れども社會多數人の一部分を占むる兒童の感化
教導と爲すに止まりて、普く廣く此れが祖父母乃至父母
兄弟の迷信頑鈍無智無教育者を改善するの實を擧ぐる
に由あし、故に吾人は目下焦眉の急務として教育の普及
と熱望するものあり、何とあれば假りに此般兒童が堂に

上りて教育を受くるありとするも、其家庭にして迷信無
教育者の集合あらんには、如何ぞ能く浮世の事は何に白
茶の清き身は、何時し如米に染らざるあきを保たんや、然
り而して此般多數人に教を布くは惟ふに宗教的を加味
したるものを以てするより善きはあし、何とあれば宗教
あるものは愚夫愚婦と雖も其道に入り易く、加ふるに其
の感化は骨髓に徹して能く根本的改善の實を擧げ、國を
愛し人を慈しむの情油然として起り、鄙吝の志は何時し
如消し殆んど神人共に同化せんとするの想を爲さしむ
る事は今更暇々を要するを須ひざるあり、故に先づ此般

の人と導くに宗教的感化を以てし、而して後これを家庭に混じて子孫に傳へ、あは其の薰陶融和するもの、或は庠序教育に優さるもの無きと謂ふべからず、然れども眼と轉じて今日あらゆる各派の宗教と稱するもの、内情を觀よ、彼等は徒に其の形骸のみを誇示するに過ぎずして、殿堂も經典も禮拜も祈禱も皆あ悉く一個の儀式的習慣に流れ果て、宗と宗と派と派と互に相ひ反目、軋轢し、異越の思を爲すもの、最て珍しからず、又去て彼の宗教家、其人あるものに就て觀よ、彼等の或者は冷心ある哲理に空しく生涯を了るあり、或る者は黄白の爲めに富者の前に叩

頭するあり、或は夢の如く經文を誦して儀式的ばかりに禮拜を爲す偽信者もあれば、一身の淨爲潔行を装ふて深山幽谷の間に潜み、白雲流水を友とする變物もあり、斯くの如く其の裏面に立入り仔細に觀察すれば、實に鼻持のあらぬ臭氣は、紛如として四散せり、豈に痛嘆に耐ゆべけんや、佛者は曰く、佛教は理深く教廣し、専門家にあらざれば、其の教理と會得し、たし、故に能化其人に、歸依して、供養を展ぶるの易きと採らざるべからずと、是れ蓋し一般佛教信徒の教法、理義を聽くに先だつて、其の能化即ち僧侶を信仰するの風習を助長し、来りたる原因あり、其意は

本来僧侶に依りて其教を知らんとするに出でたるも、其弊也。佛教を輕んじて而して僧侶を重んずるに至れるあり、夫れ師を奉ずるは道の爲めに奉ずるなり、道と捨て師と尚ぶは是れ其の本末を誤れるもの、教道の賊と云ふも取て誣言にあらず。

然りと雖も吾人は各宗教中邪道に陷るもの多きとは云はず、宗教家必ずしも形式的の木偶とのみ切言を爲し肯へんぜず、然れども本来宗祖の教と布くや國家人衆の爲にす、故を以て宗教の勢力たるや實に宇宙を動かし万世と渡りて一貫不朽のものたり。

斯の如く其係はる處重且つ大ある丈け、若し一朝誤て邪路に向はしめんや、其の殘害を及ぼすもの真に尠きにあらず、吾人豈に辯を好まんや、然れども又た聊か宗義ニ附て一言せざるべからざるものあり、乞ふ暫く其の所懐を述べしめよ。

熟ら各宗教の教義とする處を案ずるに、方今文運日進の抽象世界あるにも係はらず、仍ほ十八世紀末造の陳想と固守し、佛教社會に於ける信者の安心は現世的にあらずして、未來的に傾き、現實にあらずして空想に向ひ、當然吾人の行ふべき義務と抛擲し、動もすれば厭世に流れ、近く

人生の急務を談せず、企望を遠く後世に及ぼして現在の境界に置かず、魂魄は人象以外に超脱して空しく天國と夢み、只管ら未來を樂み且つ怖れて絶えて現世に喜憂を抱かず、國家と宗教とを箇々分離し、以て宗義を得たりと爲す、嗚呼、真に惟れ濟世の本旨を失へるもの、此れ猶疾病の因る處を知らずして猥に投藥を爲す庸醫の如し、其の國家を謬らざるもの殆んど稀なり、斯の如く現世を悲觀的に見做し、人生の希望を抛棄し世を厭ひ生に倦み、徒らに未來の快樂即ち十萬億土の極樂往生を談ずるの愚を演んぜんよりは、寧ろ家財什器を估却して以て佛者に捧

ぐる代りに一隻の軍艦を造るの資に供するの優されるに孰れぞや

以上述るが如く吾人は壁頭佛教には同意を表せざる處のものなり、然れども佛に大乘小乗の經典乃ち方便と眞實との二教あり、佛者は圓滿福德万能の力を備具せる靈物なれば、衆生の願ふ處感應せざると云ふ事なすと雖も如何せん該教の構成たる方便猥りに多きに過ぎ、其の教導する處のもの多くは無智無識の僧侶或は愚人の口端に濫用せられ、眞實の教理は埋没して又其の跡を留めざるに至る、吾人は固より古今許多の高僧碩徳が教導上に

爲せる總ての言行を指して悉く不條理不真理とは絶叫せざれども、或る宗義に依れば五障といふ説を以て女人は罪深きものと爲し、一切女人の交通を嚴禁せり、惟ふに其の所説の非理酷烈なる他宗に於て其例を見ず、耶蘇は一夫一婦を説き、モルモン宗は一夫數妻を教ふるが如き畢竟男女の道は衆禍の根本たると共に、亦た此れ安寧幸福道德禮義の淵源なり、故に若し男女の道を禁ずれば衆生茲に滅却して國家徒て亡ぶ、未だ國家の存在せずして能く教法のみ長なへに存するものあるを聞かず、豈に抱腹絶倒すべきにあらずとせんや、ゆるる世にも不親切不

真理の宗教に身軀生命を托し、仁義道德の頹廢せざるを矯正せんとす、此れ何ぞ庸醫が草根木皮或は牛溲馬勃を以て痼疾を療せんと欲するに異ならんや、其の効果を以て得べからざるは固より其處なり、されば此れが根本的革新の實を擧げ、其の創痍を治し、以て良劑を投せざれば到底矯正治復の望はあらざるなり、然らば即ち此れが適當の投劑は果して何物かある、曰く真理教是れなり、吾人の謂ゆる真理教とは抹香臭き厭世的宗教にあらずして文明的活潑なる智育の教旨なり、言を換へて曰へば純粹の宗教にあらずして宗教的を加味せる人類の生活

上と發達上とに最も必要のものなり、故に獨り愚夫愚婦の迷信を破るに止まらず、此の教義を深く腦底に印すれば、智者は倍々智に、賢者は益々賢に、庶幾はくは以て國家及び社會を裨益するものあらんか。

然り而して此の教旨たるや、吾人一家言の命題立説せしものにあらず、其の沿革する處は別項「要叙」に於て述べたる如く了邦と云へる偉人の懇に説きたるものにして、其説く處積極的、日本教にして吾國民の須臾も念頭を脱却すべからざるの教旨なり、故に能く此の教旨に則り以て國家及び人衆を經營融和せしめ、なほ心靜かに躰裕かに

油然たる國家的の觀念、勃然たる倫理的の概念、言と換へて言へば一切の道德、一切の幸福、一切の美、一切の善、都て同時に發揚するや、毫も疑を容れざる處なりき。

殊に來る明治廿二年には、開闢以來未曾有の珍事として、内外雜居の擧あり、四海萬國と互に交際を爲すの曉に至らば、勢外教師は續々とし入込むに至れるなるべし、されば此れに相拮抗して譲らざる丈の否な、此れに凌駕するもの万々勝れ優りたる日本文明の一種の宗教的教義を發揚して、真理的日本を造り以て万國に誇視せざるべからざるなり、夫れ日本臣民は畏くも、天皇陛下の臣民

なり外國の臣民にあらざれば固より外教を信すべき謂
れなし、しゆも邦人にして外教に心酔し、其の自國を忘る
るもの往々其例尠からじ宗教豈に夫れ輕々に看過すべ
きものならんや

況んや外教徒の形式上外觀上如何に謹慎にして慈愛を
呈出する事よ假令以表面のみにせよ慈善事業は到る處
に行はれ教師の銳意熱心なる烈日金を鎔す三伏の日も
嚴寒肌膚を刺す雨雪の夜も東奔西走孜孜汲々として只
管ら布教に餘念なきものゝ如し故によしや口に蜜あり
腹に劍ありとするも其の真美善の發揚に怠らざるは感

すべきにあらずや我が宗教家たるもの須臾も等閑に座
視すべき時にあらざるなり

吾人は大に此處に省る所あり乃ち前人の説能く吾が國
教に命中するを思ひ謹んで茲に其の所説の概略を世に
公にする事とせり讀者幸に先づ左の勅語を捧讀して吾
人の謂ゆる眞理的教旨なるものゝ略原其の眞意の存す
る所と知れ

勅語

朕惟ふに我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳と樹つ
ること深厚なり我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一

にして世々厥美と濟せるは此れ我國體の精華にして、教
育の淵源亦實に此に存す、爾臣民父母に孝に、兄弟に友に、
夫婦相和し、朋友相信し、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし
學と修め業と習ひ以て智能を啓發し、徳器を成就し以て
公益を廣め、世務を開き、常に國憲を重し、國法に遵ひ、一旦
緩急あれば、義勇公に奉し、以て天壤無窮の皇運と扶翼す
べし、是の如きは、獨り朕の忠良の臣民たるのみならず、又
以て爾祖先の遺風と顯彰するに足らん、
斯の道は實に我の皇祖皇宗の遺訓にして、子孫臣民の俱
に遵守すへき所、之と古今に通して謬らす、之と中外に施

して悖らす、朕、爾臣民と俱に廢膺して成其徳を一にせん
ことと庶幾す

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

眞理的教義は畏くも 勅語と奉戴して以て其の義を立
てしなり、然れども其の所説廣大にして能く一卷の中に
悉く網羅記載し了るを得ん、唯だ其の萃と抜き其の華と
摘み其の意義の是非曲直は輿論に訴るに在りとす、若し
夫れ此教義にして果して誤り勿らしめん、如進んで此
れが興振に尽碎し更に異日と期して再び讀者の尊眼と

煩すの時あるべし、讀者乞ふ此れを諒せよ

要叙

一本教の起原は去る明治二十九年八月炎熱熾くが如きの候、余
 は微疴保養旁暑と有馬の温泉場に避け興の坊列空に滞在せ
 し際、偶ま隣室に一人の翁あり了拜と號し齒己に耳順に二三
 と超にたらんか頭髮半ば霜と載き鬚長く垂れ脊高く肉瘡
 せて色艶く迄白く一見其の都雅寛裕なる風采は自から他と
 推服せしむるものありき且つや身に纏ふ衣襟等も粗野なら
 ず如何なる人物なるかは余か當時容易く判断に苦む處なり
 しが其の言語舉動に依りて察すれば惟ふに尋常一様の人に
 あらず必ずや浮世の酸も甘さも善も悪も悉く嘗盡し知了せ
 るの偉人たる事は心窃に會得せりかくて翁は徒然の餘隣室

に孤棲せる余に向つて言と交し此坊の振合通常旅宿と異なる
 點より詰湯の人身に効あるも慢りに入浴するは反つて害
 ある事なご何にくれとなく親切懇到に慰諭せられ且つ余が
 此處に到るは始ての事とて其の最奇の鼓が瀧、落葉山等の名
 地、豚區は言ふも更なり鳥地獄、炭酸泉なご世に稀有の名所古
 跡と落もなく翁が頽齡なるにも係はらず自ら余と導きて其
 の地と目撃せしめ懇懇昔時同地の繁榮せし由來迄も餘る隈
 なく説示して諄々倦まず宛然嚴父が愛兒に向つて示導する
 が如しかくれば余も何時しか翁に親炙し日に翁に隨伴して
 日夕山河と逍遙散策し三度の食事すら俱に共にするに至り
 ぬ斯くて余は最と樂しき中に一週間ばかりと過しけるが一

夜翁は徐ろに語て曰く子が言に依れば子は豫て慈善新報を
 るものと發刊せりと今や新聞雜誌は世間其數幾百なると知
 らず然れども未だ替て慈善的の新聞なるものは聞くと稀な
 りとす其の舉や我れの大に悦ぶ所なり然れども子よ一言以
 て告ぐる所あらんとす凡る慈善は單に施すと一方にのみ偏
 せずして寧ろ教ゆるに勤めざるべからず其例は云々として諄
 々數万言果は話頭は漸次進みて慈悲の本源たる佛教等の事
 より大に宗教的教育の事に説き及したり其の所説の快活に
 して愷切なる轉た余として感ぜしめぬ今其の要點と試に摘
 舉すれば佛教は既に腐敗して迷信者多ければ此れが迷信と
 破らざれば其の進歩は見ると得べからず又た基督教の跋扈

は毫も憂ふるに足らず云々而して最後に曰く今や我國の文
 化は年々歳々進歩すると同時に赫香深たる佛教や乾燥無味
 にして國脉に合せざる基督教は自然と衰頽萎靡するに至ら
 ん故に凡百の事は唯一の真理と根軸として其の範圍と脱却
 する事なく之と以て支配せしめざるべからず乃ち邦人が此
 と以て處世の要素立脚の方針とすべきことと知らしむるは
 目下の一大焦眉の急務なりとて真理の何物たる事と反覆丁
 寧に説き且つ既に翁が從來他に諭示教導せし者此の教旨に
 依りて著々其の著しき効驗と奏せし實例と夥多舉示し更ら
 に容と改乞ふて曰く我が齡已に耳順と超ゆ餘す處幾許もな
 し殊に昔時は王事に勤勞せしが今や身軀は齡と共に衰弱す

されば如何に心は剛くとも此の老軀と以て再び世に立ち社
 會と教導誘提する事恰も嫩候が水中の月と捉ると一縷眞に
 果敢なき思ひなるぞかし子は前途春秋に審む希くは社會の
 爲めに予に代りて其の真理と吾が同胞兄弟に遍く聞知せし
 むる事に勤めよ聞く子に幸ひ印刷の機械と藏せりと願くは
 寸時も早く之れと印刷に附し余の意見と世に公にするの方
 法と講し以て同胞に幸福と與へよと余素より同感にして特
 に翁の慈仁なるに感じければ快く之と諾し不日翁の所懐と
 満さん事と約し滞在中心所説と筆記しけり斯て余は名残り
 おしくも翁と袂と別ち歸省したるは同八月下旬にてありし
 其後世事匆忙爲めに此の出版も直ちに手と着るに至らず烏

免勿々殆ど一ヶ年の歳月と費したりしが近時に至り貴顯の方々にも不勘賛成と得又四五の同感者が大に力と添へ呉れしとに依り爰に翁の希望と満足せしめ得るの端緒と開き漸く出版するに至りぬ是れ余の社會に盡さんとする一片の微意なるのみ而して翁は少しく考ふる所あればとて其氏名と世に公にせしめず是れ余の甚だ遺憾とする所なれども其は他日機と見て社會に紹介することとし先づ其意見と公にし以て同胞に賛成と請はんとす

一本書は右に述ぶる如く了邦翁の意見と筆記したるものによらず著者妄りに取捨して本旨と誤る如きことあらば當に翁の煩と爲すのみならず同胞と誤らしむることなしとせず將

た筆記の儘之と印刷したるものあれば其意義の重複し若ば誤字等もなしと云ふべからず讀者之と諒せよ

一本書と出版するや或は好事の譏りなきと保せずと雖も然れども其教旨は我國体に副ひ倫道德と經緯と爲し真理と根軸として一切の道德と説くものなれば我帝國の臣民たるもの誰か之と賛成せざるものあらんや特に先年了邦翁に出版せんとしたる然諾と重んじたるに因る處多ければなり

一本書出版に就ては條例の示す所著者素より責任ありと雖も本教の主眼目的の可否に至りては輿論に問ふのみ故に此等に就ては著者其責に任せず讀者又之と諒せよ

明治三十年九月

石西尚一誌

眞理教綱目

- 一本教は天祖肇造の唯一的國体たる日本臣民たるを忘るべからず
- 一本教は臣民として忠孝仁愛義侠の心あるべき事
- 一本教は華倫道德と重んずべき事
- 一本教は眞理の中に安心の位置と求得すべき事
- 一本教は自己の希望と達せんが爲め修因と爲す事
- 一本教は自己の希望と達せんが爲め其勢力と大にすべき事
- 一本教は生々の恩と謝するが爲め宇宙間に對し禮拜すべき事
- 一本教は自己の業務に對し極めて勤勉なるべき事

眞理教

第一教旨

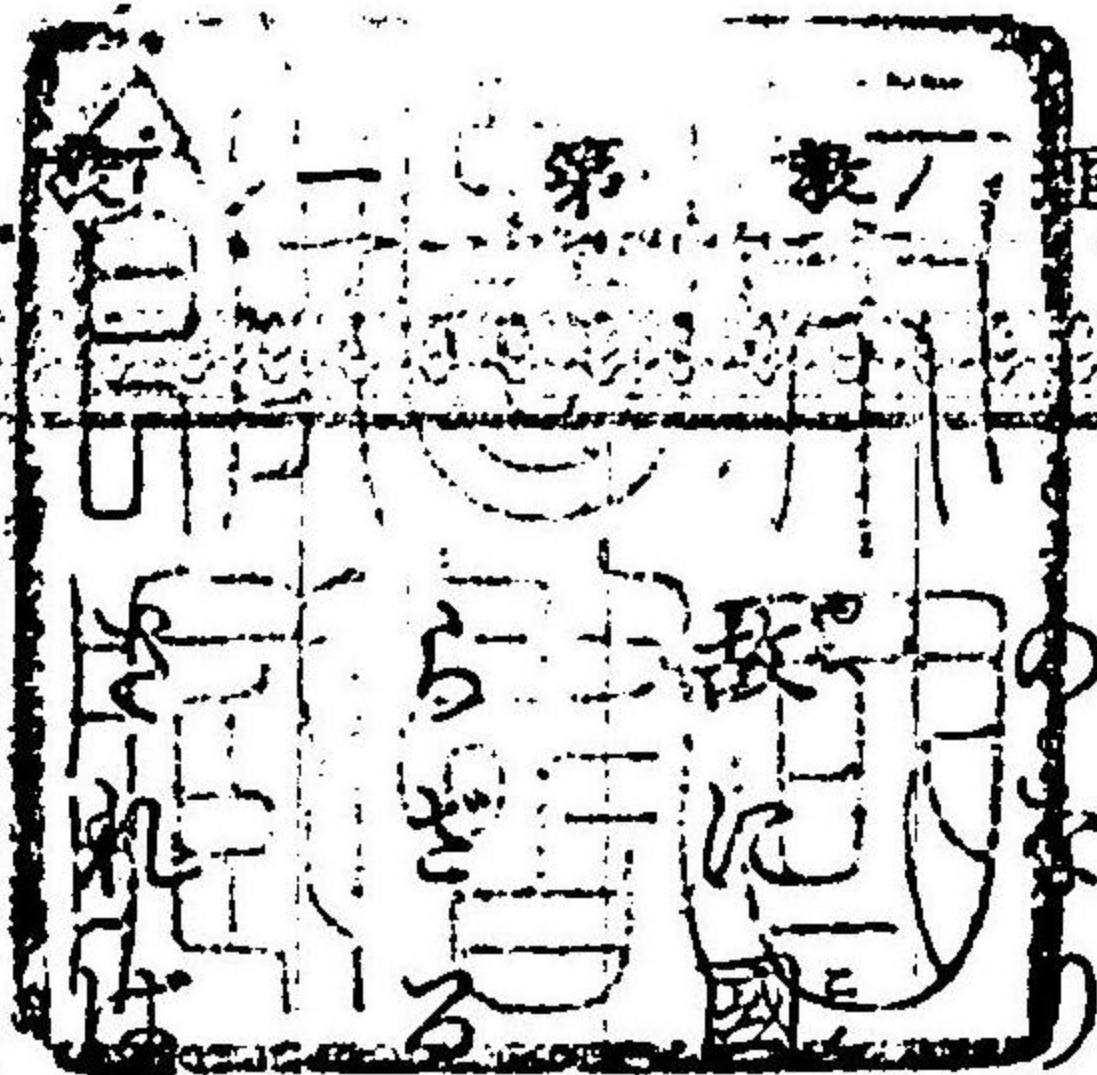
凡そ國家は教あるに依りて榮へ教は人に依りて貴きも

家の盛んなると衰ふるとは教の正しきと正しきとによる

正しき教を弘めて國家の安寧靜謐を祈求すべし

は固より論なきなり

本教は宇宙間に存在せる眞理の華を擇び萃と拔き尊皇愛國を以て緯となし華倫道德を以て經となす



眞理教第一

而して其眞理とは個々偏見の眞理と云ふに非らずして
 千古不拔公平無私なる眞理にあり
 本教は一に眞理を以て進退するが故に宗教に謂ゆる教
 世助人の神もなく佛もなければ本尊として恭敬禮拜祈
 念する所の偶像もあることなし
 本教が定むる處の綱目と誦讀して專念其の眞理と悟り
 無上快樂の現世國土に棲息安住するを本教の主義の最
 大眼目ありとす
 其要素綱目と別ちて左の各項とす

一本教は天祖肇造の唯一的國體たる日本臣民たるを

忘るべからざる事

一本教は臣民として忠孝仁愛義侠の心あるべき事

一本教は羣倫道德と重んずべき事

一本教は眞理の中に安心の位置を求得すべき事

一本教は自己の希望を達せんが爲め修因を爲す事

一本教は自己の希望を達せんが爲め其の勢力を大に

すべき事

一本教は生々の恩を謝するが爲め宇宙間に對し禮拜

すべき事

一本教は自己の業務に對し極めて勤勉あるべき事

此綱目要素は朝夕誦讀すべきものとす
此綱目と誦讀して怠らず之を以て智見の眞理に寫し假
令小事たりとも理に悖り彝倫の道に背展すべからず
心の淨拭を怠ることなく施行するは本教の最要素たり
本教を信する者は無上快樂の邦土に棲息するの本分た
るを信すべきなり

此社會は快樂の社會にして苦惱の社會に非ず圓滿の園
圃にして闕欠の汚地にあらず看よ風伯を勞せずして瀛
舩能く万里の波濤を蹴り人力を要せずして瀛車能く千
里の山河を貫き彼岸に達するにあらずや

又看よ四季折々の美麗なる花々は嬌顔を開きて我を待
ち幾多の禽鳥は妙音を放ちて我に聞かしむ

電力と蒸氣力は殆んど天工を凌ぎ我を悦ばしめ我を驚
かしむ其巧妙なる智力の發達は底止する處を知らず人
智の進むるに随つて又快樂も進み来り迹きにし我等の
父母の夢にだも見ざる珍らしきものを我等は見事と
得るなり

啞者も云はしめ聾者も聞かしめ隻脚無きものも歩行せ
しむるにあらずや

人或は云はん此れ物質的の快樂にして眞に以て理想的

の樂にあらずと然れども凡そ心意の不滿も見聞の爲に
 抹殺され氣鬱煩惱も清潔なる空氣の爲に散ずるにあらずや
 物質上の快樂は一時のみとし再び室と鎖さば忽ち不満
 は簇然として起り氣鬱煩惱一室に彌蔓す之と慰し之と
 醫して身心を淨拭するにあらずれば眞の快樂は求むべ
 からざるなり
 彼の狂氣亂心して身を殺し人を害ふは多く身心を淨拭
 せざるの結果ならずんばあらず
 人若し此の苦痛を脱し眞の快樂と得んとすれば眞理に

歸依するより善きはなし然れとも志操軟弱にて鞏固の
 行なければ人間最大の樂事快事の希望も亦得べからず
 今爰に説く眞理教は積極的趣味ある日本的宇宙統一の
 教旨にして世に所謂自力他力の宗教にあらざるなり
 要するに眞理教を發揚して宇宙間に耻じざる日本を作
 らんとするものなり
 故に本教を能く信するに於ては父子の親、君臣の義、夫婦
 の愛、朋友の情、師弟長幼の序、全く自然に無量の功德備は
 り且つ各自の企望と達し物質と理想上とに於ける快樂
 と兩ながら稟受するや毫も疑なし

されば我國民たるものは必ず信すべく一日も忘るべからざる教旨なり

本教の信者は世上幾多の神社佛堂を捨てて顧さると云偏僻狹隘の心性に陷るべからず

釋迦は千古の大偉人にして能く無智の衆生を濟度せり其功績没すべきものにあらず

神は國民の祖先なり或は又天祖の國土肇造に賛助し又は國難に殉じ大偉績ありたる人等なれば須く尊崇せざるべからず

神佛共に恭敬禮拜し其祠堂を建築修繕するは人世の本

分にして本教の毫も禁せざる處なり

本教の信仰一村一町に渡らば能く一村一町の災害と除

き一郡一國に渡らば一郡一國能く幸福に浴するは毫も

疑を容る可からず仁義の郷には盜賊なければなり

五穀豐穰風雨時に隨ひ四海波穩にして順風枝を鳴さず

てふ事は決して架空の景様詞にあらず事實は確かに此

れを証據立つあるべし

神佛は恭敬禮拜こそすべけれ冥助を祈り幸福を求めん

が爲めに珍羞を供へ燈火を照し柏手祈禱して一身一家

の災害を除ぬん事を祈るは畢竟愚夫愚婦の事真に徒事

たると免れず本教信者は須く考ふべき事あり
眞理教は因果應報の眞理を信し常に此れに依て進退し
此れに依て安住し而して他念あきと我教の本意とす
我教は彼の佛教が三世因果を説き及ぼすとは大に趣を
異とせり

本教は前世と未来は取て問ふ處にあらず唯一に吾人の
現在經過しつつある今世の因果を説くものあり
因果應報の三世に及ばざる理解は後に委敷説明するこ
ととなし我教の主張する因果應報を爰に詳記説明す
因果應報の眞理は万物の原則にして一事一物此原則に

違ふものはあらず

凡各自の吉凶禍福は各個人が自業自得即自ら招きたる
處にして決して他作他働にあらず皆悉く己が蒔きし善
惡の結果とす

我教の趣意とする處は善因善果惡因惡果の眞理に基き
惡を挫き善を勧むるにあり

平易に之を説明せば因は即原因にて種子なり果は結果
にて花と實なり蒔かぬ種子は芽の生る事なく花を咲か
しむることなく咲かぬ花の實を結ぶ例とは尚更なきな
り

謬に收れぬ財布に出すものゝと欲せば先收る
るが肝要なり本教は乃ち彝倫道德と資料として善果を
得んとする所以なり
此彝倫道德なるものを至公至正に行ふもの即眞理契合
すと云ふなり此眞理に依らざるものは衒世の偽善なり
此至公至正なる因果應報の眞理を悟りて善因を蒔くと
きは世は福祿圓滿極まりなき果報を得るものあり
此眞理に戻るときは世に禍殃災害立るに至り家を失ひ
身と亡すことは理の然らしむる所にして明鏡に照すが
如し

此因果應報の眞理は一切善法律義の戒体を發揚せしむ
るの原素にして此理を推して確守すると本教の安身立
命とする處あり

第二因果應報の理解

因果と云へば人多くは佛教の事と思へども因果は總て
もの道理にて西洋の言葉ではエーセイション(原因結
果)と云ひ西洋の學者は大凡物因ありて而して後物果あ
り」と云ひ支那の學者は功の成るは成るの日に成るにあら
ず蓋し必ず由て起るところあり」と云ひ因果は即ち眞理の
常經にして原因あれば結果あり結果あれば原因ある所

以にして。此理は昔も今も洋の東西を通じて少しも異なることなきにより我教旨はこの理に基き因果應報を説くものなり。然れども我真理教は佛教の所謂三世の因果を説かずして現賢を主とするなり。今世人の惑ひを解めんため聊佛教の三世因果と云ふ説と對照して之を明かにせんとす

抑も釋迦は千古の偉人を以て佛教諸流の粹を抜き英を聚めて遂に印度の宗教を大成し因果應報の理を推し輪廻轉生の法を説けて解脫を説き涅槃を教へ拮据經營數百年にして漸く益々旺盛に趣き犖頭支那に入り而して

後三韓を経て我日本に傳ふ其所説たる解脫安定涅槃寂滅世人濟度の道を講ずるものにして教旨頗る味ふべき處あれども三世の因果應報に至りては全然首蒙する能はず其所謂三世の因果とは即ち前の世で作りし彼の十惡五逆の原因が今世に果を結び不幸不仕合なる者と生れ前世より造り来りし罪惡の爲に未來は地獄に落ち呵責を受ると云ひ前世に善事を爲せし者が今世に其果を結ぶと教へ善惡共に過去と現世と未來とに及ぼすものと説きたり然れども是れ畢竟愚人を濟度する方便に過ぎずして社界の文明に進むに徒に今日漸次排斥せら

るるに至れり。今継し一步を彼に假し前世に作りし善業
 又は惡業が今世に及ぼすものとすれば現世に於ける勸
 善懲惡の教化は甚だ根據なきの事と云ふべし。何となれ
 ば假令今世にて如何程善行を爲すとも若し前の世に於
 て惡事を働きたるものとせば現世は僅に前の世の罪を
 償ふに過ぎずして現世に於て爲したる善行の結果は来
 世にあらざれば得ざる事となればあり。詳敷云へば前世
 にて人を殺したる大罪人ありと假定せよ。此世に於て如
 何程善行を爲すも前世の罪は償ふ事は出来難き理とな
 る果して然らば現世に生れたる者前世に於て惡行を働

きたりし時は終生世の不幸見たらざるべからざる理と
 あらんか。れば假令現世に於て善行を爲すとも過去の
 惡業に因りて到底善果を受くる能はざるに至り其結果
 自暴自棄に陥り自簡が將さに勤むべき責任を等閑に付
 し愉安放逸徒らに姑息の策を講じて亦た永遠の鴻圖を
 畫するなき斯くの如くんば社會の進歩孰れに在る此
 等の根據なき教化は愚人は欺き得べし而も識者として
 満足せしむること能はざるなり。如斯三世因果の説を立
 てし世人を感化せんとし千數百年來人民を愚昧あらし
 めたる結果遂に何事も皆前世の約束ことと諦め終ると

云ふ有様とあり善を行ふ者も自然に消滅するに至るや
 或は今世に於て悪行を働き人を殺し一點の善行を爲さ
 ざりし悪人が若前世に人を助け善事を行ひし爲に現世
 に些少の不幸も受けずして今世の善行者よりは却て幸
 福者とありたらんには今世に益々悪人を作ると云ふ奇
 怪ある結果を見るに到らん看よ彼の佛者は佛を信じ題
 目名號等を唱ふれば恰も旭日黄霧を破りて東嶺を出で
 う闇夜を照す如く經文の功德に依り罪障消滅し鬼も佛
 とあり惡人も善人とあり即身成佛疑ひなしと然れども
 現世に於て惡事を働きたる者が如何程佛教信者と爲り題

目名號を唱へたりとて己が犯せし罪を免れ罪障消滅す
 る理あらんや此等は誠に看易きの道理ありとす且夫れ
 因果は前世より今世に及ぼし来るものとせば人を殺す
 も殺さるるも天變地異或は人為の災害に遇ふも富貴も
 貧困も病者も不具者も多く皆前世の因縁約束事とし冤
 も訴へ罪も免るの期あたらん是豈天理あらんや佛者又
 曰今の世に人を殺し又生ある者を殺す時は未来は地獄
 に陷ると知らずや國家の爲め人を殺すは即ち少數の人
 を殺して多數の人を安んぜしめんが爲めあり換言すれ
 ば一國の害惡を除きて一國の安寧を保つに在り然るを

佛者の言の如くせば愛國の爲に名譽の戦死を遂げし者
 等は地獄に陥り又社會の爲めに或る生類を殺傷したる
 者も殺生成戒を破りたる罪として同じく地獄の呵責を受
 くるに至るべく誠に勘定の合はざる事と云ふべし是等
 は真に愛國の志を殺ぐの甚しきものと云はざる可から
 ず佛教の三世因果を説きたるもの概ね如斯之れ無學僧
 侶の誤説とは云へ之を固守して立命安心を求めつゝあ
 るは笑ふべきの極にあらずや佛教は又前世の報を証せ
 ん爲め説て曰貴人の家に生れて貴まるゝあり富豪の家
 に生れて至幸あるものあり乞巧の腹に宿れる不幸者

あり天性不具にして生れ出づる可憐者あり之れ所謂前
 世の因縁の確証なりと是れ未だ其一と知りて二と知ら
 ざる愚言のみ何となれば貴人たり富者たる者或は祖先
 の善行に依り或は現世の善因を蔭たるに依り善果を得
 たるものもあるべし此善人の胎内に宿りし者胎内より
 善人の教育を受けて生れ出て生長に従ひ益々善人とな
 るあり所謂源清ければ末濁らず能く父母の教を守り此
 親にして此子ありと云ふ諺の如く胎内より善き教を受
 けたる爲め此貴人の家なる富家を相續して始めて益々
 貴まれ益々富むに至るなり若此父母の教を守らざるに

於ては貴人の子も貴人の跡を繼承し富者の息子も富家
 と相續する能はざるに至る故に貴人の家又は富家に生
 れたるもの必ずしも終身貴人なり富者なりと断言す
 ることは爲し能はざるあり金殿玉樓の中に生れ蝶よ
 花よと慈しみ育てられし者も自箇の行以惡しければ遂
 に見る影もあき破屋に住し其日の烟さへも立て難き貧
 民と成果し者も世上に間々見聞する處なり之れに反し
 て賤しき農家に生れて後天下を掌握せし豪傑もあり又
 生質の不具あり生れて後の不具者もあれど不具者必ら
 ず世に捨らるとに極まれるにもあし盲人にして大學者

と爲り獨眼跛足にして兵を能くする勇将もあり否な不
 具者にして却つて常人に勝るあり看よ世態の種々雑多
 なる不具者出るに車駕を以てし常人出づるに車馬を曳
 くありされば不具者と雖も何ぞ憂ふるに足らん但業な
 き常人の愚者貧者と憂ふるなり斯の如く今世は因果應
 報なる真理か人と左右し祖先又は現實者の行に依りて
 貴人も富人も不具者も貧者も生ずるものにて決して前
 世の因果にあらざるは炳然火を觀るよりも明あり況ん
 や前世の事を感じ居る人もあければ来世を知り居るも
 あし更に之を仔細に繰返さば人少しの惡事はそのみ咎

にもなるまじと輕舉に事を行ひ鳥獸魚類等に對し無益の殺生を爲すことあり又主親兄弟朋友妻子眷屬の間に於ても事に觸れ折に隨つて天理に違ひ不善の仕向けを爲すこと無しと云ふ可らず之れ等小惡といへども一々消すして積る時は遂に大惡となり又道理に闇きが爲め知らず識らず不測の罪惡を醸し其の結果富者の家に生るるも貧者とあり或は衛生を誤りて不具者と爲る事もあり是れ皆己の行ひの正しからざると注意の行届かざるに基因するものにて前世の報ひ等決して有るべき者にあらず善因善果は天理の正則にして少しも猶豫な

く巡り来るものなり然るに人往々表に善を装ひ内に私慾を違ふし或は陽に義を見せ陰に惡を行ふ徒ありて動もすれば徳義を破り法律を潜り以て重惡を爲し得々たるものあり天網亨で可許すべき但其罰の来るに遲速あるのみ何時か一大不幸を蒙り奈落に沈み困む必せり故に狂人の真似をして疾走するものは狂人あり惡は真似にても爲すべからず善は真似にても行ふべし一粒の種子は數百數千万を産む一度不善を行へば數年の悔と遺す事あり慎むべし凡そ因果應報ほど世に恐るときものはあらず善を爲す者には天之れに與ふるに幸福を以

てし不善を爲すものには天之に報ゆるに災害を以てす
 即ち吉慶凶禍は各元を作るの金言の如く自持たる原因
 に依りて自らに結果を得るなり賢者は此理を了得する
 が故に善行を勵み幸福を得て彼岸に達すれども愚者は
 此理に聞きが故に自諸種の惡業を造成して自苦海に沈
 むなり長壽を保つて無病健全業榮へ家富み最愛の妻子
 と一家團樂し安樂に月日を送るも亦妙齡にして世を去
 り或は多病にして薄命となり自活も爲し難く貧民乞丐
 と落ぶれ頼みとせし者には先きだされ或は屢々天災を
 蒙り不幸打續くも皆其原因のありて此結果を得たるな

り然るに佛者の言の如くせば是等は皆前世の約束事な
 りと云ひ人間生殺與奪は一に皆前前世の慈因縁が此世
 で報ふと誤解し前にも記せし如く因果應報の事は現世
 に於て歴々顯るるにも拘はらず其原因を遠く前世に求
 め自己の不善なる結果を隠蔽させんとし又は前世の因
 縁を確信するもあり實に愚の甚きものと云ふべし過
 去の原因が現世に於て結果を得ると云ふ理は毫も其謂
 れなき事あり若し之れありとせば今世の因果應報を至
 公至正に顯す事は爲し能はざるあり試に今廟堂に立ち
 て天下の大權を握る諸大臣を觀よ爵祿を戴きて位人臣

と極め顯榮身に餘りて名聲四海に布き或は暑を閑散の
 冷地に避け或は寒を暖地の浴場に防ぎ實に人世快樂の
 極點を占むる如くあれど其原因由来する處を究むれば
 遠く維新前後に在りて朝庭幕府の間に奔走し或は図圖
 に汚辱を被り或は砲烟彈雨の間に起卧し以て一身を國
 家の犠牲に供せし結果あり其他財産を抛ち父母に離れ
 妻子を捨て力を王事に尽したるに縁由せずんばあらず
 夫れ人は始終絶へず心神の平穩あるものにあらず或は
 物慾の爲に動ゆされ或は情實の爲に己が身を殺すの境
 に臨むことあり慎ざる可らず惟ふに人幸福と身に受く

る事あるも當然の出来事として別に意に留ざる事多
 るべきも之れに反して一朝不幸に遭遇したる時は直に
 其苦痛を感じ悲傷し易き者あり然れども因果の天則は
 決して不公平のものにあらず我身に害を與ふるものは
 我身の外にあらざるなり故に災害を被りし時其原由を
 深く考究せば其應報の争ふ可らざるを覺知するに至る
 べし應報の遲速は恰も大木の倒るるが如し多くは虫内
 に生して之を蝕荒し而して風外より吹きて之を倒すあ
 り一家の倒るるや先づ障壁剝落し柱梁腐朽し而して暴
 風之を壓到するが如く到底免るべからざるものあれば。

我眞理教者は善行を爲して之を補償すべきは言を須ひ
 ざるなり。假令ば春暖の好時季に大板の種子を蒔く時は
 數日と經ずして芽を生じ數十日と經て食用と爲ると雖
 ども桃李等の種子を蒔くときは數年の後にあらざれば菓
 實を生ぜざると一般にして既に蒔きたる種子は晚きと
 早きとはあるも何れの日も必ず芽を出し實を生じ来
 ることは毫も誤りなき事なり
 斯説き来れば既に因果應報の眞理は前世より及ぼす者
 にあらざることば充分に明瞭せしならん然時は今世の
 善因を蒔きたる人の善果を得て今世を安逸に暮し毫も

因善と告す。惡因を蒔きたる人の惡果を結びて常に困苦の
 中に生涯を過すと云ふ結果を見るに至る。昔より今日
 に至るまで素封の家長く榮へて子孫長久し居るは必善
 因を蒔きたる家なるべく。如何に黄金と山岳の如く積み重
 ぬる者にてても善を施さざるに於ては早晚必潰爰は免れ
 ざるなり。是等古今に其例證多し。己れ一人金を貯へば足
 れりとして毫も他を顧みざるは社會の組織に背反し人情
 に反馳するものなり。元來人は人に依て社會を組織し而
 して棲息するものなれば相共に救済補助するは人の本
 分あり義務なり。然るに徒らに名利の爲めに慈善を爲す

は名利を買ひたる價なれば其善因最も輕し。凡慈善は獨
 人間のみなならず禽獸に至るまで此心と推し及さる可
 らず。輓近狡奴ありて名利の爲めに金錢を投じ人望を釣
 せんとして恩威を弄する者多し其所爲甚だ不徳に近きも
 のたり。慈善を爲すには所謂陰徳を積むこそ最も至大あ
 る善因と蔭くものあり。又徳行は其郷を潤すとして一人の
 行爲は之を見習ひ徳孤ならず必ず相提撕するもの生じ
 或は他人の惡心も感化し善道に導くものなり。凡そ善を
 行ふほど精神の爽且つ快あるはなし。然るに天の欲する
 所と爲さずして天の欲せざる所と爲せば天も亦其欲す

る處と爲さずして欲せざる所と爲すなり。されば能く惡
 業を退け善因を修むる事を日に三省して怠らざるに於
 ては乃ち善人たるに至るべし。此善人こそ我真理教の教
 旨に副ふものにして己の希望を遂げ得らるるなり。真理
 教は斯の如き信者を得て共に一世を安樂に暮さんと欲
 するに外あらざるあり

第三 因果應報は子孫に及ぼす理解

修因感化は真理教の基本にして前にも記せし如く物理
 の原則なり。今此宇宙万般の事物は皆原因なくして結果
 と生ずるものは一も之れなし。之を大にすれば宇宙の變

遷社會の消長より之を小にしては一喜一憂起居動靜に至る迄一つも此原則の仕配を受けざるものなき今試に此因縁は其子孫に及ぼす古来よりの事實談を擧げんに某所の資財家に一人の男子あり蝶よ花よと何不自由なく養育せしまゝ金錢を費す事左ながら土塊の如く果は惡所に通ひ家に居る事いと稀なりとせば兩親其他縁者のものも痛く之を憂ひて時々意見を加へし如ど馬耳東風つゆ感應する氣色なき茲に於て親屬打寄り相談しけるよう彼れに嫁を迎へたらんには身を落付け放蕩に耽けることも止むならんと早速相應しき嫁を尋ね迎へと

りしが案の如く以前と打て變り謹直となり長の歲月男妾四人も擧げていと睦まじく日を送りけり其後兩親は世を去り彼れの長女は早や十六の春を迎へたりとせば嫁入仕度にとて衣類小道具も多く買求め来ん春は何れへの縁付させんと喜び居りしに夏の頃になりて此長女計らずも頭へ腫物を發し初の程は賣藥にて手當せしが漸次病勢烈しく美しきうは玉の黒髪も何時しと失せて腫物は頭部一圓に擴がり醫師も詮方なくぞ見へにける長女は鏡に向ひ以前に如はる面影となりとをいたく歎き悲しみ涙の絶へる間とてはあらざりきこれを親しく

目撃する兩親の心中如何ならん思ひやるだに痛まじや
 さて醫師の言に依れば彼の長女は遺傳性梅毒にして容
 易に快復の見込なしとの實に恐るべきは梅毒なり惟ふ
 に彼を災せずして却て彼の長女を困む其親の悲しみ
 は此惡因の報ひと知るべし其他放蕩の結果鼻柱を失ひ
 若しくは壯年に禿頭となり或は生れも付ぬ盲目とな
 り甚しきは骨のらみとなりて命を失ふもの世間其例珍
 らしめらさずこれ皆自暴自棄にして親より受けたる大切
 なる身体髮膚を毀損し終るなり實に歎べきの限りなら
 ずや

天は善因に與ふるに善果を以てするは争ふべからざる
 事なり此れを平易に言へば其與へらるる者の好まぬ善
 果は與へざるものにして其者の好むものを以て之に酬
 ゆるものなり善人が子孫長久を希へば子孫長久の幸福
 を受くるものにして其望む處と其適當なるものを以て
 之れに酬ゆるなり假令は繁く降る雪は詩人に於ては無
 量の雅興ありとも之れに反して旅客には多少の艱難な
 ると一般善者の望む子孫長久は天悦んで之を與ふれど
 も其善因を受くる子孫に於てもよく之を受くると受け
 ざるに依るなり

眞理

眞理

能く受くるとは即祖先の善因を受繼ぐべき資格を有するを云ふ資格とは受くる其者も善者にして毫も惡因を混ぜざるものと云ふなり

惡因も亦た此れと同じく祖先の惡因に善因なる消毒劑と用以すして祖先の惡因を受繼ぐ資格あるもの此報を感ずるなり

されば修因は固と固と絶縁的永久に及ぶものにあらず試に彼の時針儀を見よ今日之れに捻を掛る時は短きも十數時長きは數百時其針尖を廻轉せしむるも之を取扱者の不注意より或は之を損じ又は轉倒する時は器械の

運轉と止む故に取扱者の注意あれば決して廻轉と止む時あし然れども元来一回の捻は十數時又は數百時を保つも決して其上無窮に運轉せしむるの力なきものあれば其捻力の尽き指針の運轉と止むる時あるを豫め思はざる可らず

親の修因が子孫に及ぼすも此れと同じ理あり親の代修因多しと雖も限りある力能く數年を保つ事能はざるに至る徒らに感果の時代は去り更に修因の時代の来るあり子孫たるもの修因を慮らずして善果を得べき事を思はざるべからざるあり

第四 罪科の消滅する理解

凡そ人は全智全能を有する者に在らざるが故に稍もすれば宇宙の真理に背きて各種の愆情に制せられ外より襲ひ来れる些少の刺激に堪へ得ずして小にしては道德上の罪を犯し大にしては國の法律に背き憐れ身は断頭場裏の露と消はゆくもあり、又は終身獄窓に繋留されて死改するもありけり

此等は固より頑鈍無智無識の小人にして本来教の何たるを知らず、只だ徒らに目前の射利に汲々として因果の真理を辨ぜざるに職由せずんばあらず誠に歎はしきの

至りにあらずや

本教は或宗に謂へるが如く一念専心唱名せば五惡十惡も救助さるとの教にはあらず

一度罪を犯すや必ず之を補償せざるべからざるあり是れ本教の示す處とすされば公法に背かば公法上の處断を受け徳義に背かば徳義上の制裁を受け而して速に改悛悔悟の實を奏すべし

本教の意旨を遵守遂行せば朦朧たる浮雲を吹拂ひ天光の赫灼たるを見るが如く法律の罪因も迅かに自由の身とあり一家團欒の中に樂しき月日を迎ひふるに至らん

道徳上の罪に至りては本教の綱目に訴へ自ら責め自ら
 改め眞理を求得して安住するに至らば其罪の消滅する
 や疑ひあし
 本教の命ずる處は信賞必罰にあり人を教傷するよりも
 寧ろ人を救助するにあり
 罪を償には善行を以てせざるべからず假令は有毒劑を
 服する者も一滴の解毒劑を投ずれば能く其功を奏する
 と等しく若し其行惡事ありと悟らば忽ち改悛して一念
 善行を以て補償すべし

第五 信仰の深厚より素願を達する秘訣

眞理教は信仰を専らとす信仰とは自己が精神の奥に存
 在せる良心を惹起して外誘物を排し断乎として感はず
 疑はず始終其の本領を一貫するを要するを云ふなり
 天地宇宙間の眞理たる本教に一身を任せたる者は惡事
 は即時断して之を爲さず善事は即時之を爲すべし
 我等の一世は常に快樂にして苦痛を受けざるものと確
 信し日々綱目を誦讀して其心を精淨ならしむべし
 一點の汚物は眞理の鏡に照して之を除去し迷信をなご
 する様に勤め只管本教に安心を求むべきものとす
 自己の素願を遂げんとあらば先づ之れが資料を造作す

べし

資料とは即因を施すと云ふ因を施すとは種子を蒔くと云ふ種子を蒔とは善行を積む事あり

善行の標準を左に示し置けば之を日夜服膺して此善根あるものを漸次積み重ねべきあり

自己の素願に依るとは各自所願の大小如何に準じて善を積むの意なり

假令は人命を救ふの善を積めば已れ亦た身命を救はる事あり長命を願はんとなれば放生の善を行ひ無病健

全と希んと欲すれば病者を救ひ富貴を願はば貧者を憫

み孝子を得たくは己親に孝を盡し忠僕を得んと欲せば己の主に忠を盡すの善を行ふべし

凡そ報ふ所の結果は直接と迂廻せるとあり雨量天に在れども雨ふるには時あり時たらざれば雨ふらず是等は

宜しく時々物々に應じ開悟知覺して其真理を推究するを肝要ありとす

修因の標準

君主の爲めに身命を輕んじ國家の爲には生命を賭して誠心誠意に尽碎し而して若し身命を捨て名譽の死と遂

げたらんには此れを第一の善因とす

主親に事へて忠孝と全ふせしものは第一の善因とす
 人命を救助せしもの此れを第二の善因とす
 婦能く夫に仕へ貞節と全ふせば第三の善因とす
 衆人の爲公共の便を謀り道路を開鑿して其事業私利に
 渉らざるものは概ね第三の善因とす
 有益ある書籍と著はし單に私利私益を圖るにあらずと
 て廣く衆人を教育せしむる目的を以て事に従ふもの概
 第三の善因とす
 世の爲め有益ある事業を興し私利に渉らざるものは第
 三の善因とす又其資を補助したるものは其者の貧富の

程度により其額の多少ありと雖ども概第七の善因とす
 無縁貧窮の患者を憐み醫師を向け藥劑を恵み看病を成
 したるものは概ね第四の善因とす
 効にして親なく老いて子なき貧窮者の饑渴を救ふ爲め
 に金品を恵みしものは第五の善因とす
 人を諫むるに聖賢の教を以てし因て以て惡人をして善
 人に化せしめ人の正に行ふべき道に歸順せしむるもの
 は第六の善因とす
 忠君愛國人士の石碑を建設し其徳を不朽に傳へしめん
 ために勞力と資力とを施せしものは第七の善因とす

右に示せるは唯標準として概略を示せしものあれば他
 は之に準じて考察すべし且つ道徳を修め慈善の行を爲
 すためには勞力と財貨とを吝まらずして善因を積む可し
 世には此の二たつものは修因には毫も關係なきもの
 と見做し汲々として唯だ私利私慾を營み轉んでも徒ら
 に起さず土砂にても攪んで起つと云ふ猶太主義を懐抱
 し他人の爲め將た公共の爲めに毫も施捨する事を爲さ
 ず己れ自らは五穀豊穰にして倉庫に充ち闔家安全にし
 て無病長久なれかしと祈願して天に訴ふるとも天如何
 ぞ此れに同感を表すべき凡そ此世には原因結果あり

て其効用を逞ふするものあり然るを時めぬ種子に向つ
 て繁茂なれかし生長せよかしと焦心するとも空より有
 と生ずるの理なし一と一とを合すれば二なる數を生ず
 れども零は依然たる零なればなりこれ獨り人事のみ然
 り支配せられんや万有皆與ふるは乃ち取るてふ真理の
 支配は免る事を得ざるなり
 故に素願に應じて善因を施し豫ても示せる如く勢力を
 強めて己の希望を宇宙間に訴へ彼の綱目と日常誦讀し
 て怠らざるに於ては長壽も保つを得可く壯健も得らる
 可く幸運も招くを得可く將た病痾も治し災害も除き一

家園樂最も樂しき最も麗はしきに至らん事固より易か
たるべし

若し或は希望の達せざるに於ては更らに修因を施すべ
し前にも記せし如く此善果は直接に来ると又迂回して
遅く来るとあり然れども早晚必ず應報の来るは疑ふ
べき事にあらず

己の希望を達せしめて反つて後日の憂を招く事となる
ものは天は之を拒み其希望を與へざるあり天艱難を下
して人を玉成すると云ひ或は人間万事塞翁の馬と謂へ
るは此れなり然る場合には希望の達せざるが却て我等

の幸福を會得し決して狼狽輕擧の事あるべからず畢竟
修因の善果は希望の外を以て真理は之に報ゆべきもの
なり

第六 希望を大にすべし

善因を施すと同時に他に惡業を造ざる事最も肝要なり
真理教を信するものは希望心を最大あらしむる事を勤
むべし

此希望心も等しく本教の腦髓たる真理の範圍内なる事
を忘る可からず

社會は個人の積聚して組織せる處にして個人能く活動

し能く進歩せば社會も亦た活動進歩するあり未だ個人
 の進歩を離れて社會の活動するものはあらず個人の活
 動と謂へば社會の進歩に伴ふべく社會の進歩と云へば
 個人の活動必當に之に伴ふべし要は並行すべし偏廢せ
 ざるなり
 希望の大あるが活動進歩の由つて生づる所あり凡そ小
 成に安んじて満足するものは勢力伸びずして活動進歩
 の妨害とあるものあり満足主義は穀潰しの名を以て厄
 か視せらるべし
 正慾の人は先づ志氣に富むのなり希望の大なるもの

は志を立て身と興し目的を貫くの大良劑あり
 世に貴人富者と呼ばるる者は皆此の希望の大なりしが
 爲め此名を成さしめたるなり
 希望の大なる人は常に窮苦に耐へ艱難に克ち憂愁を凌
 ぎて區々の成敗に挫折せず假令過ることあるも遂に其
 志を爲すものなり
 貴人として尊まらるるも姑より貴人なるにあらず必らず
 其原因のあるものなり即ち多くは衆人に勝れて能く學
 びを修め行を正し鞠窮不拔の精神の發す所にして歸する
 所は希望の大なりし所以なり

富者も亦然り業を營む勵精勇奮百難を排して遂に大望
 と貫きしに因らずんばあらず
 遠く數千里の山河を超へ父母妻子を措き危険を犯して
 見も知りもせぬ異國に辛勞するも畢竟己の大なる望を
 達せんとするに原因す
 欲望の大なる人は活動進歩の人と謂ふべし凡そ社會の
 進歩は偏に此種の人の方に頼るなり
 社會若し此種の人を欠ければ譬へば暗夜に明を失ひ深山
 幽谷に路を失ひし人の如く其歧路に迷はん此欲望の正
 大にして尋常ならざるが己と富まし人を富まし國の富

まし神とも崇められ我等が尊敬するものとあるなり
 若し此欲望の大あらずして小成に満足するものゝみ集
 合する邦國は活動する能はざるが故に遂には腐敗して
 滅亡するに至らん家貧く國富まざる時は軍資窮乏して
 戦ふ能はず軍艦も銃砲も賣尽して遂には他の奴隸たる
 に至らん
 人の生死原因は種々ある中に人は此欲望を廢せざるが
 生くる所謂にして此欲望を廢したらば即ち死するもの
 あり配遇者一方が死して煙と散せば年を経ずして又一
 方が露と消ゆる事あり是即ち今世夫婦の共に長壽の欲

望を断ちて心神を弱めたる結果なり
 故に本教は人に望を大にすることを勧む之を平易に云
 へば大慾をすくむるものなり然れども邪慾なれとは勧
 めざるあり
 人を傷け國を害し依て以て不正を働き慾望を達したる
 ものは一時の榮を得るも眞の富貴にあらず此等は我教
 の道にあらずれば宜敷眞理を基とする我教の範圍内に
 於て慾望を達すべきあり

第七 勢力を盛んにするべし

勢力を盛んにするは先づ己の精神を鞏固盛大なら

しむるにあり
 此勢力を盛大ならしむるにも必ず本教の眞理の範圍を
 脱出することなきを要す
 精神の傾注する處必ず此れと透徹するの覺悟を要す
 所謂精神の一到金石も能く貫かしむると云は此れあり
 乃ち己の素望を達し一念を貫かざれば措かざるの決心
 と以て事を處せざるべからず
 晨起より夜臥に至るまで一秒時も希望を放たず他念な
 く望む處に向て勢力を注ぐこと所要なり
 此勢力なるものは不可思議なるものにして且恐るべき

ものなり虎と見て石に立つ矢もあるは乃ち此なり故に
 此勢力盛んなる時は總ての障害物に打勝ものなり
 故の銃丸の有する透徹力を見よ常に硝薬の有する弾力
 の強弱に比例して増減をなすものあり
 弾力強ければ透徹力隨て増す理にして其割合は立方の
 九々と以て増すが故に弾力二倍を増す時は透徹力は四
 倍とあり弾力四倍ある時は透徹力は八倍となるものあ
 り
 試に砲銃に丸を装めて一發するや銃丸は幾間と隔てた
 る先に進みて其目的物を穿つ之れ即砲銃の勢力を實行

したるものなり
 若し此砲銃にして勢力あつらしめんは是れ砲銃の用と
 大く者にして即ち無用の長物となり終らんのみ此は有
 形の勢力あれども本教の秘訣とする無形の勢力は心意
 の働を強めて精神の勢力を昌盛にし而して内心深く之
 を藏して優美を装ひ外面上他人をして容易に窺ふ能は
 ざらしむ然り而して此勢力たるや日々事を爲す上に於
 て頗る有用大切なるものなり凡そ宇宙間に存在せる總
 ての事々物々は皆勢力に支配せられざるはあし故に必
 要に應じ此勢力を以て萬事に當るべし假令は一家の主

人自己の營業に此昌んなる精神の勢力を以て處する時は延以て雇人に傳播し共に一家中の勢力を強むるが故に隨て業榮へ家富むと雖ども之れに反して若し主人の勢力の一部を割きて他の事件に移し或は又遊興の點に及す時は忍ち本業に要する勢力は隨て薄弱と爲るを免れず故を以て自然と本業は衰微するに至るは實に看易きの道理なり二兎を追ふ獵師は一兎も獲る事を得ずとは此謂なるべし茲に此れが適例の一語を擧げんに或る警察に於て盗人の秘訣とも云ふべきことと自白せし事あり其言に凡そ盜賊に忍び入らんとあらば先づ其家の

内幕盛衰如何を探り窺ひ當時其家の主公或は家族等是不品行又は不善にして家政も修まらず日々に衰へ不幸の打重り身代連々降り既と見れば此に忍入べし大概は好結果を得るものあれども之に反して主人及家族も勤勉者にして増々繁榮なる徳望家なるに於ては決して入べからず必ずや失敗を得るものなりと云ひしは真に一理屈ある申分と云ふべし他人の財貨を盗まんとする惡人なれば假令其家は昌んなるにせよ衰ふるにせよ天は觀面に之れに障害を與へて盗人として其の技を逞ふせしめざる筈なるに反つて彼れに便利を與へ村雲を興し

て明月を蔽隠し淫雨を降して犯罪に加功し遂に彼に満
 足を與へ以て天綱を免らしめ惡人は幸福を得て善人の
 反つて不幸を見る正反對なる事柄は往々見聞する處あ
 り此に於ては天道是耶非耶と嘆き只管自身自らの不運
 を啣ちて止む者も尠あらず其結果終に世人を惑はし
 て迷ひを起さしむるの源とあり世の真理を誤るものも
 あれども此は即精神の勢力消長如何に存するものあり
 彼の一家の主公が自己の本務に對して心意を他に移し
 勢力を弱めたる結果が本業を衰へしめたるものあり獵
 師の一兎だも得ざるは精神を二ツに割きたる結果双方

の勢力を弱めて一も獲らざるに至れるあり又彼の衰微
 の家に盜賊の忍び入りて仕合能く財寶を奪ひ去りしは
 盜まるる方の精神の勢力衰退して萬事不注意あるに基
 き反つて盜人の方に勢力を逞ふせしめ此勢力に打敗け
 たるものあり何とあらば善人にせよ惡人にせよ人間と
 して精神上の勢力に於ては異なる點は少しも無ければあ
 り然れども此盜人の勢力を強めて得たる財貨は原と惡
 業あれば勿論天は用捨せずして必ず早晚惡業の報を降
 すものあれども世に惡運強き者と云ふ事あり此は取も
 直さず惡人の勢力強きが致す處にして決して怪むに足

らず然れども此盗人ある者は元来無智にして自活さへ
 爲し能はず己の不自由より無止一時猛烈ある勢力を利
 用して得たるものあれば犯罪者の身に取りては中心決
 して快らず其恐怖慚愧の一念は常に本心を惱まし良心
 に耻ちけるが故に遂には勢力も薄弱とあるものにて其
 勢力の衰へたる時に於て忽ち真理の制裁を受け或は自
 ら溝中に投じ或は官の手に縛せられて其責罰を蒙るは
 當然の結果にして少も疑ふべきにあらず斯る道理の存
 するよりして假令に善人の勢力弱ければとて必らずし
 も悪人は劣ると断定すべからず勢力弱きものに於ても

善人あるときは天理が悪人を制して寄せ付けざるもの
 あれども窮すれば乱すと云ふことあり只精神の鞏固こ
 そ處世上最も必要あれ夫れ然り免も角精神の勢力は一
 種別物として不可思議千万あるものあり此勢力を利用
 するは恰も彼の火薬に火を點じつゝあるものと日常心
 得能々注意熟考し須臾も此れを等閑に附すべきにあら
 ず故に善事を行ひ善き種子を蒔きて自ら他に耻らざる
 ものと自信して精神を強固にし自然と勢力を積むを以
 て人間の最大義務と心得べし彼の貧苦病苦又は災患者
 を憐むも畢竟己の爲あり鄙言に情けは人の爲めあらず

と云ふも即ち此事にして時に或は難澁を装ふ不埒もの
もありとするも其は恵みを受くる方の事にして恵み遺
る方は貧者の悲しみを見て之に笑を得させ己の精神を
喜ばしめ己に満足と與へて我は善人あり惡人にあらざ
れば不幸を受くるの道理あしとて常に精神を強むるが
故に萬事に注意して此勢力も衰へざるに至るありされ
ば恵みを受くる者の喜びは早晚必ず恵みたる者に報ひ
真理の幸福と與ふるあり故に無形の勢力を強めて自己
の希望と達せしめんと勤むるが實に本教の秘訣なりと
す

以上説き来りし如く本教の眼目とする處は宇宙の真理
と根本として因果應報の理を明かにし智育の發達と斗
り智極りて醜惡の行を制し各自の希望と達せしめて圓
満ある社會を作り出さんとするにあり夫れ人善と好む
は天性にして毫も争ふべからざる事實あれども此事を
知りながら尚ほ惡事を働くは畢竟智育と徳育とを辨へ
ざるに因れる事あり惟ふに一人の害惡は其人の心事如
何に拘はらず其影響する處は即社會の間接と直接とを
問はず百般の禍源とあるが故に此表裏を明かにし天賦
の能力あらん限り各自の希望と達せしめんには本教に

依るの外他に其の方法あるべからず且つ夫れ世の中に
 人の心の同じからざるは其面の如くあれば只善惡と云
 ふ簡單ある區別を爲すに止まらず此れを仔細に觀察す
 れば雅俗清濁剛柔緩急の夫々持前あり又人の能力にも
 祖先遺傳の際限ありて其以上に上る事は到底爲し難き
 ものなれば先づ己の能力と生質との如何を深く推考し
 て己の力に及ぶものを以て身分相應の希望を持つべし
 希望の勢力との度と過し徒らに己の力量に及ばざる不
 相應のものを成し遂げんとして餘計な危険を冒すは真
 に暴虎憑河の狂愚と演ずるの白痴者たるを免れず故と

以て本教の説く處は人々各自が固有の持前を空ふせず
 何處も其の天真素質の全量と琢磨して光を放たしむる
 にあり要は人生の本来に無きものを造りて之に投ぐる
 にあらず唯有るものと悉皆發生せしめて遺すことあき
 に至らしめ此真理と安心の根本として深く腦底に藏め
 先憂後樂の志と存して己を修養すると同時に又た他人
 に説き及ぼして感應融化せしめ共に俱に幸福を増進せ
 しめたらんには即ち本教の説く修因となり單に貧苦病
 苦を見て救ふの善よりは遙かに勝りたる善因と爲るあ
 り然して後吾人は茲に日常宇宙に向つては生々の恩と

眞理教

謝すべきなり何となれば日月共に宇宙に掛り其の和ら
 けき陽光に照らされて新鮮ある大氣を呼吸し衣服飲食
 と兩ながら具備し依て以て生存し依て以て無量の樂事
 と得るは是れ皆一に宇宙の賜ものに外あらずされば此
 の賜物を無代價にて受けつゝある吾人が此れに向つて
 感謝するは當然の義務あり然れども水能く舟を浮し又
 能く舟を覆す諺の如く時に或は狂風暴雨田野を荒し家
 屋を倒し火山の破裂大地の震動江海の鳴嘯等往々生靈
 と殺す如き悲惨な珍事は年々歳々にあらずるはなし
 然れども是等災害は天の與ふるにあらずして我が自ら

求むるにあり假令は人身の天然に病ある事なし其之あ
 るは人智未發よりして天則を破り不養生を犯し祖先以
 來の遺傳に加へて自ら傷くるの罪あらざるはあし此れ畢竟
 此真理を知らざるに職由することなれば社會の知識進
 歩する時は病毒も未發に防ふは易き事と爲るに至らん
 故に知識を進めて共に快樂も進め安心立命の點も金錢
 以上にあらしめ天與の不可思議ある精神を愈益々高尚
 に推進して文明の門に入り彌々真理の原則を極め物理
 の蘊奥と味ひ漸く深入して佛理の妙如何と學ぶも又快
 ならずや之を要するに世の文明進歩に伴ひ活潑ある精

神と磨きて真理の中より最大幸福を得て現世に極樂界
と形造り國民全体の大多數は茲に悠々以て天命と樂み
俱に與に健全無病なる社會を作らんことを務めざるべ
からずと爾云

真理教附録

日常信者の心得

器傾けば水溢る國家安穩ならざれば其身安からず故に我真理
教の信者は邦家に對する勤めと先とせざるべからず
一國の強弱は國民の元氣に係るものなれば忠君愛國の志と存
し宜しく義勇公に報ずるの心得なかるべからず勞働は國家の
財産なり一人の怠惰は國家一分の財産と減ずるものなれば勤
勉努力以て國の富と爲し身の富と爲さざるべからず我教の真
義と悟り之と守る人一人なりとも多ければ多きだけ國家と富
強ならしむるものなり
我真理教の信者は惡と爲さずして善と行ひ苟も他人の不利と

顧みざる如き事もあるべからず

人の此世に生れ出たるは己一身の私利に汲々たるが爲にあら

ず公利公益と圖りて國の爲他人の爲めにし百事苟もすべから

ざるの天職と盡すべきなり

自己一身の私利の爲他と交ぐ等の事は本教の深く誠むる所な

り宜く廣く他人と協和一致事に當り俱樂の道と講すべきなり

我教の信者は教育と以て最も大切なるものとす曰體育曰家庭

之れ等の教育亦決して怒諸にすべからず

古來學説と經驗とに依るも懐胎の婦人が動作行爲の如何に従

つて胎兒が資性となり遂に意外の兒と擧ぐるに至ること多し

習慣は第二の天性にして人世の最も喜ぶべき利益と最も恐る

べき弊害と曠生する歧路なれば深く考察事に處するの心得あ
るべきなり

善事は小事と雖も行ふとよしとし惡は小事なりとも行ふ可か

らず故に徳と積むこと多ければ惡は之に克つ能はざるに至ら

ん

惡と捨て善と行ふ者は徳其身に積し善と捨て惡と行ふものは

禍必ず其身に及ぼすものなり

善と爲す事最も樂しと古人の云へるが如く善と行へば其心常

に安泰にしてすざしく假令窮困したりとも他の尊敬と受け座

即安靜にして恰も樂土のうちにあるが如き心地するものなり

惡と行へば其心常に不快にして快からず假令物質的の快樂と

身に受けつゝあるも他の嫌忌と受け其内心常に煩悶悩乱して
呵責せられつゝあるものなり

罪惡と離すは畢竟無教育の結果にして事物の理否と辨せざる
輩に多ければ教育の力に據りて罪惡に陥らざる覺悟あるべき
なり

凡そ自己の行爲の善惡と自己が識別するは畢竟純粹無垢なる
良心の審判に任ずるものなれば常に少しにても善道に近づくの
心得あるべきなり

人は常に過ち無きに注意すべし一階遇てば數階と下るものな
れば宜しく其墜落せざる前に注意と怠るべからず
心に非なる事と認めめて之と改むるに憚るべからず過て改むる

と眞の教義に隨ふものとす
凡る人の行爲と見るに概ね權門富貴の士が一舉一動と執りて
恰好の標準と見做す事多し然れども此類の人士と雖も悉く

善美眞の範圍内に動くものとは断言すべからず取捨折衷は己
が良心の審判に委せざるべからず
身体は常に健全なると要すされば深く衛生に意と注ぎ其身の

健全と保つべし是れ獨り其身の幸福のみならず父母に孝にし
て國家に忠なる所以なればなり
凡そ事業と營むに種々の心得べき事あり勤勉忍耐信用之れな

り此三ツの者は幸福の母なれば最も心と用ゆべきなり
常に勉強の心なくして只管安逸と貪り自己が従ふべき業に熱

心するなくんば自ずと世人の信用と缺ぎ遂に何事も意に任せざるに至る

福徳は自然に來るものにあらず皆人の取るに任するものなれば徒手にして福と求めんは恰も木に縁りて魚と求ると異ならず宜く其心得なかるべからず

勉強忍耐なきものは翼なき鳥の如く活動する能はざるが故に信用なし信用なければ豈幸福と得べけんや

凡一業と營む者に忍耐不拔の心なかるべからず忍耐なきものは小破瀾にも挫折して忽ち其業と失ふものなり

事業と成效せしめんと欲せば勇往奮進艱難辛苦に遭遇するも夜心挫折する等の事あるべからず

事業は其爲さんと欲する前に於て深く思考と凝らし充分成效と期して後此れに従事すべし既に従事したる上は百事誠實忍耐の功と積まざるべからず

事業にして一時の好奇心に驅られ前後の思料なからんか半途に失墜して其結果詐欺の所行に陥り其身も共に亡すことあり

不正の働は契約と破り義務と果すと得ず遂に云ふべからざるの不幸に沈淪し終身事と興す能はざるに至るものなり

勤儉節約は安靜の基礎なるのみならず仁惠の根本なれば吝嗇と節約とと恣らざらんことと要す

貯蓄なきものは底なき徳利に水と盛と同一く只注入するのみにして幾年と経るも貯藏する能はざるなり

勉強は救護者にして節儉は保存者なり救護者ありて保存者あ
らば富まざらんと欲するも得べからず

財産は消費せざるに依りて蓄むものなり哲人の云へるあり我
富は財と得るにあらざして費と省きたるなりと實に味ふべき
事ならずや

人には各々天性の存するあるも凡そ事と爲すに沈着にして敏
捷と要す沈着にあらざれば物の前後と誤り敏捷にあらざれば
商業の機と失ふ事あればなり古歌に「急がずばぬれまじものと

旅人が後とよりはるゝ野邊の村兩」と輕忽に事と爲すもの須ら
く味ふべき言なり
克己と云ふ事は何業に拘はらず最も必要の事なり傲慢邪僻に

て己に克つことの出来ざるものは動もすれば私情に拘泥し正
義と過つての行爲あり慎むべきなり

頻繁煩雜なる社會に身と投じ名と擧げ家と興すは逆も尋常一
様の業にあらざ必ずや克己の氣象に據らざる可らず

人必ず進取の氣象無からざるべからず進取の氣象に乏しけ
れば一時と苟偷し隨て競争の心と損失するものなり故に事業

の發達進歩は得て望むべからざるに至るなり
獨立心は何事業に關せず必要なり人にして獨立の心なきは羽

翼なき鳥類の如し何ぞ活動することを得んや
人は四肢五體と有するが故に自ら働きて衣食すべきは固より
其所なり然るに毫も奮發力なく只管父兄知人の保護にのみ依

頼し獨立行為し能はざる如きは人の本務に背戻せるものなり
四肢五官の健全なる限りは勉強事に従ひ忍耐以て其業を終へ
他の信用と得て社會に獨立せざるべからず徒に父兄知人に依
頼する者は恩人の死亡と同時に因頼失敗の禍に陥るの憂ある
ものなり
凡そ事業と爲すや自己の創見と開發せざるべからず徒らに他
人の故慮に依て様と拙く者争てか大事業と遂げ得べきや深く
考慮せざるべからず
他人の利益ある事業と見て直に其故智と學びて欺真似と演じ
僅かに銖銖の利と拾ふ人は到底巨利と博せんこと思もよらず

るなり
名譽は固より重せざる可らず然れども真正の名譽は彼の名利
と售るの云ひにあらざして己が地位と敗らざるにあり
利と見て他人と排擠し營々として射利に犯弄する者は徒に其
名と汚し章苟もすれば賤行に陥り其極他人の信用愛顧と失ふ
に到るべし
西人曾て其雇人に諭して曰へるあり予が此資産と積むに至り
しは實に唯一片の名譽心ありしに因てのみと大に味ふべき言
なり

迷信と敗るべし

凡そ迷信者ほど貴重の時間と費し徒らに神や佛と祈りて肝

心の立身出世の秘訣と知らぬ懶惰の貧乏人多きはなし世の人真に其身と立希望と違せんと思はば先づ獨立不羈の精神と恭はざるべからず佛人の諺に「自ら助けよ然らば天爾と助けんと」人立身と爲したくば徒らに神佛に祈願し又は他人に依頼する根情と絶ち我身自ら奮勵せざるべからず即裸躰にて水中に飛び込むが如き勇奮をかるべからず看ずや彼天文學の發明者コペルニカスは蒸餾燒の子にして羅馬法皇グレゴリー第七世は大工の子なりしと是れ皆神や佛に依頼せず能く己の力と盡して社會の真理に訴へ百挫不撓不屈の精神と以て大事業と果せし人たる事と忘るべからず病氣の平癒と醫師と藥劑に求めずして徒らに神佛に祈り

々子の生ぜし汚水即ち俗にお供水と稱ふるものと以て病瘡と癒さんと謀る愚夫愚婦あり又は天神様の丑や堂宇に安置せる赤色の佛像と撫ぜ廻して頭痛や齒痛と癒し玉へと齒科醫や按摩と取違ふるの所作と爲すものあり譬へば大阪地方にては觀世音は眼病と癒し天神様は脚氣病に利益あり故に他の病氣にせよ脚氣病なりとて願へば治するなりとて天満宮と取違ひ參詣するものもあれば日限りの地藏尊と稱へて日限と極めて日參すれば病氣平癒するとて恰も病院に入院するものゝ如くに參詣と爲すもあり或は盆會の十日參りとして其日一日參詣すれば十日參りたるに相當するの價値ありとて炎熱の候に終日終夜佛巡りとなして運動の度と過し疲勞

の餘り持病と發する老人あり實に其愚昧は怒れ氣の毒の至りと云ふべし加之ならず彼等愚民の言ふ處と聞けば昔から觀世音堂に籠りて眼病の治せし人もあれば天満宮に詣りて脚氣の癒へたる人もありと如何にも山間の地にして樹木茂り水清く新鮮なる空氣の流通宜き所に於て靜かに療養せば獨り眼病のみならず胃病と治するの効もあるべく又脚氣病の如きは醫師も轉地保養と勸むる處なる程なれば其効も著しるし決して神佛祈禱の結果にはあらざるなり古語にも神と祭るに神在すが如くすとあり佛も亦此の如し只其神佛なるものは皆己の心よりするものと知るべし

現世は自己の行狀に依りて樂みと得らるゝにも拘はらず自

ら善難の國土と誤解し佛に頼りて未來の安樂國へれ迎と待つと云ひ甚しきは自殺して未來に往くと急ぎ或は今世は薄縁なれば未來は夫婦と成りて共白髮還借老と遂げんと互に手に手と取りて情死する等の事もあり惟ふに未來は如何なる樂土なるか智者は更なり現世に活佛と云はるゝ人達も未だ見たる例も無ければ往て再び還り來し者もなければ當てにはならぬ特に死すれば北邙一斤の煙となり隣れ身は白骨と化する身なる事と知りつゝも如此迷と興しあたら答の花と落す痴人あり假りに煙の落付く未來夫婦とするも現世人間の盡すべき義務も全く修めず六親眷屬と泣かせたるものがなごか未來の極樂郷で夫婦の契りと結ばるべきか笑ふべ

き事と云ふべし

孟蘭盆會と稱へ俄に佛檀の如の菓と拂ひ塵と除きて如来と
 位牌と祭る不熟の菓物或は不消化の蒸物等と云て祖先の靈
 魂と迎ふと稱へ惟ふに佛教信者の死亡者は皆成佛せずして
 迷ひ居るものと信ずるものと如し佛と信仰して極樂に往生
 し居るものとせば迷ひ居る亡者あるべき筈を此等は迷信
 の甚きより生ずるものにして佛者己が教化と布かんとして
 此淺薄なることと作爲し人と愚にしたるものと云ふべし祖
 先の祭祀は素より報本の義發にして行はざるべからざれど
 も倭して以て不道理の事と行はしむ國家第二の相續者たる
 明治の少年如何ぞ斯の如き事と信ずべけんや慨はしき限り

なり

又施餓鬼と稱へて一片の木屑やうのものに先祖代々の或名
 なるものと記して寺院に納めしむることあり此れ等は畢竟
 寺院の籠下の薪と爲る事と知らず跡は之と土佐衛門的河川
 に流して南無阿彌陀佛と稱名して大に善根と積きたらん如
 くしたり顔の奔婆あり之れ果して何等の所爲なるか施餓鬼
 の文字には少しもあたらざるなり是又佛法教化の弊と云は
 ざるべからず祖先の爲めに木屑は何の用にも立たざるべし
 已れ既に善からぬ事と爲し或は又其善からぬ事に着手せず
 と雖も心中惡心と萌すものは天は之に災禍と與ふるもの
 なるに其應報と悟らずして一朝身に不幸と被りたるときは

粹かに神や佛に向ひ今の難儀と御救ひ召せと所謂苦痛時の
 神頼みと爲す輩數多あり左りながら己の悪行は善事と以て
 償ふより他に道あることをし然ると己が爲せし罪と神が償
 ひ玉ふ道理なし迷信者云へるあり子の祈禱に依りて親の病
 の癒へし事は往々ある事なりと云ふものあり此祈禱こそ即
 ち因果の真理に慥ひたるものと云ふべし如何となれば其祈
 禱者は即ち孝子なるが故に天其孝心に感應して其親の病癒
 と癒したるなりされば此至誠と推して父母の看病に盡し又
 は醫師に托し良劑と服さしむる時は佛神に祈禱するより幾
 層勝りたる孝道にして病も速く癒るならん凡そ天地の真理
 に慥ひたる行あらば祈禱せずとも其効果は見るものなり管

公の歌あり「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守
 らん」と

祖先の命日なりとて當日は精進せんと獸肉魚肉と食せずし
 て直ぐ翌日は精進上げと稱へて鶏も締むれば鯛も煮殺し平
 日に倍せる肉食して以て直ちに精進の理合と爲し或は又數
 十日間亡者の爲に精進して滋養物と欠くことあり如此只口
 腹斗りの精進と何程爲せばとて祖先や亡者も悦ぶ可き道理
 無く畢竟食物の精進よりは心の精進即ち至誠と盡してこそ
 願ふ効果あるものなり人倫に背かず業に勵み社會に盡し祖
 先の名と汚さず以て正道と子孫に傳へてこそ眞の精進とも
 云ふ可きなり心すべきことにてこそ

運氣縁談待人方位占ひと稱ふるものあり世の迷信の徒は己
 の行ふべき事は此卜者に判断と托し万事唯だ占者の判断に
 よりて事と行ふもの多し元より親戚も朋友も無く己の事と
 己に於て考察するの明なきか又は愚にして獨断の爲り難き
 ものは止と得ず金錢と投じて又は委屬して親戚朋友の代り
 に占者に吉凶利害得失と相談するは是又是非無き事なれど
 も普通の人間にして特に立派なる親戚もあり又は相談すべ
 き人の有るにも拘はらず縁もなき占者に自己の秘密と打明
 け重大の事迄判断と依頼するとはさても愚昧の至りを
 り畢竟幸運は自己の自らの行爲に依りて得ると得られざる
 とあり縁に言へる如く「運は天にあり取ると取らざるとは己

の自由なり」と惟ふに縁談待人方位等は自己以外に能く之れ
 が利害吉凶と知覚する者少し況んや時に親戚故舊と措て何
 と苦んでか縁もゆかりもなき占者に之が説と求むるや實に
 無智無識の至りと云ふべし
 稻荷下げとて狐狸と違ふものあり是等の者へ自分の營業上
 の事より縁邊の事或は病氣の平癒と祈り中には總ての事も
 稻荷下げに託して狐狸の判断に任する愚人あり言はずとも
 知るべし狐狸は下等の動物にして稻荷大明神と思ふは大を
 る誤りなり四ツ足の獸類が堂々たる萬物の靈長たる人間の
 其行爲と断し得べき謂れあることなし是等狐狸なるものは
 下等動物中にも殊に生質の惡きものにて折々戯と爲して人

間に害と與ふる事あり全く食物と求むるためなれば憐みて
 食物と與へ遣るとすれば其までなれども稻荷の葉なりとて
 或は怖れて宮の如きものと建て之に鎮め込み食物と供へ
 て神と敬ひ拍手して頭と下げ之と禮拜する如きは下等動物
 に劣りたる人間と云ふべく耻かしくも亦た不名譽の極とい
 ふべし是等の事として外人に聞かしめなば如何其愚昧の極
 に抱腹絶倒するならん嗚呼斯の如きは獨り一箇人の嗤笑と
 招くに止まらず實に我國民全体の恥辱なり又此狐下しなる
 奇異なる素振りと爲し如何にも狐狸の憑り居る如く装ひ妄
 りに判断的謔言と吐き或は時として魚類の骨豆腐の油揚等
 の煮ざるものとムシヤ〜と異様なる素振と爲しては之と

喰ひ左ながら狐狸自身の如くに見せかけ又或は天井及高さ
 處に飛付き普通人間の爲し難き所作と爲して愚民と驚かし
 て増々狐狸に憑れ居ることと疑はしめざらんと務め其の退
 て締宅するや日常天井に飛付く事と練習し恰も輕業師の如
 き真似と爲し或は蜘蛛又は虫類と取りて喰ふと見せ手早く懐
 に入るゝ等手品的練習と爲し以て官の目と忍び愚民と欺く
 種となし居るにも係はず迷信の甚き毫も之と疑はず萬事
 稻荷様に向の上でなければ實行せずとて終に詐僞者の手に
 陥るもの數多あり實に斯る淺ましき人物が未だ明治の社會
 に存在し居りては外人に向つて文明と誇らんとするも得べ
 けんや概はしき事と云ふべし

明治三十年十月三十日印刷
明治三十年十一月三日發行

正價金六拾錢

著者兼發行者 石 西 尚 一

印 刷 者 石 西 豐 藏

發 賣 所 慈 善 新 報 社

發 賣 所 慈 善 新 報 社 支 局

發 賣 所 慈 善 新 報 社 代 理 店

印 刷 所 大 石 堂 活 版 部

大阪市北區玉江町壹丁目百廿壹番屋敷

大阪市北區常安町八拾壹番屋敷

大阪市北區玉江町壹丁目百廿壹番屋敷

京都市上京區三條通小橋西入壹番戶

兵庫縣神戸市江川町六拾五番屋敷

大阪市北區玉江町壹丁目百廿壹番屋敷

